剣道「単元プログラム」の開発

――　「安全で緊張感を楽しめる試合」の成立を目指した授業展開の工夫　――

長期研修員　　上原　昌弘

《研究の概要》

本研究は、中学校保健体育「武道」領域で、安全で緊張感を楽しめる試合の成立を目指した指導資料「単元プログラム」の作成を行った。剣道の初心者が剣道を楽しく学び、深めていくためには、「相手の動きに応じた攻防ができるようにする」ことが求められる。自分の体格や体力、適性などに応じ、最も使いやすい技（得意技）を身に付けることができ、相手に有効打突を打ち込めることは、剣道の楽しさや喜びを味わうことに大きく関連してくる。基礎・基本の習得をベースに、学習内容を精選し、習得を活用していく３年間の過程を構築し単元構成を開発した。

キーワード　【保健体育－中　剣道　指導資料　単元プログラム　】

群馬県総合教育センター

分類記号：Ｇ０６－０３　平成２６年度　２５２集

Ⅰ　主題設定の理由

平成18年12月に約60年ぶりに改正された教育基本法では、教育の目標として「伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」が新たに規定された。

その後、平成20年１月の中央教育審議会答申の中で、「学習体験のないまま領域を選択しているのではないか」との指摘と、「武道については、その学習を通じて我が国固有の伝統と文化に、より一層触れることができるよう指導の在り方を改善」することが示された。

これを受け、学習指導要領では武道を含めた全ての領域が必修となり、武道が「伝統と文化を尊重しそれらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」とうたう改正教育基本法の教育の目標を実現する役割を担うことになった。

このことから、柔道のよさや相撲のよさを踏まえながら、なぜ今、剣道を学ぶ必要があるのかということを考えてみると、全日本剣道連盟は、「剣道は、剣の理法の修練による人間形成の道である。」と考えており、剣道を学ぶことは、「心を学ぶ」こととなり、自分自身を高められ、日本のよき伝統文化を学ぶ単元であると言える。

剣道は、「動と静」が表裏一体となって心技体の成長を築き上げる。また、稽古前に行う黙想は、自己の精神を統一させ、明鏡止水の境地へと導いていく。集中力を最大限に高める心の自己コントロールそのものである。また、一方では、相手に一対一で対峙し気勢を充実させて体全体から渾身の一撃を狙う躍動的な姿は、剣道の醍醐味である。

このような伝統文化を学ぶ剣道の授業を通して培われる心と体のコントロールは、様々な生活の場面で生かされ、生徒個々の「思考力、判断力、表現力」となってこれからの時代を生きる若者にとって必要不可欠となる。本単元「剣道」の単元構成を考え、授業開発、授業実践をすることは、「生きる力」の根幹をなす部分の育成のために重要な役割を担うはずである。

武道の授業における種目別実施校の割合は、文科省の調査によると柔道は65%、剣道は30%、その他は相撲やなぎなたなどとなっている。本県の実施校の割合は、柔道は81%、剣道14%、その他は相撲となっている。実態においては、「剣道」に対して「怖そう」「痛そう」「臭そう」といった印象を持つ生徒が多く、指導者側としては、専門外の先生が多く、 同じ武道の柔道と比較して指導書や研究なども少ないことから、「指導方法」、「所作」、「審判」が難しいと感じているケースが多い。さらに、「防具をそろえる」といった経済的な面でも剣道を学校選択から遠ざけている要因となっている。

しかし、重傷事故の事例も少なく、日常生活で活用できる歴史的要素が他の種目より多く、高い教育効果が期待される単元の一つと認識している。正に、学習指導要領の目的を達成させるためには、剣道がより適していると考える。

そこで、私が現在までに剣道の授業と部活動指導で、生徒から学んだ指導技術と文献や先行研究で紹介されている指導技術を盛り込んだ指導資料集「単元プログラム」を作成することで、初めて剣道を学ぶ生徒や剣道専門外の体育教師に、剣道の授業を通して、「学ぶことの楽しさや喜び」や「指導することの喜び」を味わってもらう一助になればと考えた。さらには、剣道は、年齢や性別を関係なく生涯を通じて楽しめるスポーツ的要素を持つ種目でもある。発育・発達が著しい中学生に、剣道の授業を通し、健康で豊かなスポーツライフを送るきっかけつくりの一端となることを望み、この機会に提案してみたいと考えこの主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

剣道の授業で、「学ぶことの楽しさや喜び」や「指導することの喜び」を味わうために、「安全で緊張感を楽しめる試合」の成立を目指した授業を展開するための「単元プログラム」を作成する。

Ⅲ　研究の内容

１　基本的な考え方

・剣道に初めて触れる中学生に対して、「安全で緊張感を楽しめる試合」を経験させるには、ごく簡単な試合で発揮できる技の習得方法や攻防の仕方の考え方等を取り入れた３年間を通した単元構造図と各学年の指導計画と各時間の展開案を作成する。

・伝統文化や運動の特性に触れさせるためには、生徒の関心を引くような、身近な歴史的逸話等を集め、各授業で紹介すると効果的と考える。

・具体的な技能指導に関しては、「学び合い」の活動を取り入れ、「いつ、基本動作や基本となる技を使えば、試合を楽しめるのか」を考えさせる。

・教材や教具などの環境面の工夫をし､生徒が剣道の醍醐味を味わえるような配慮をするとともに、「基礎・基本」を定着させ、「習得・活用・探究」の段階から発展的に学習できるよう指導過程や指導展開を構築する。

これらを準備することで、剣道専門以外の教員にも比較的指導しやすく、「安全で緊張感を楽しめる試合」を提供することができ、生徒も教師も満足のいく剣道の授業ができると考える。

（１）　剣道授業の単元構想

「中学校学習指導要領解説保健体育編」には、技能について、第１・２学年では、「相手の動きに応じた基本動作から、基本となる技を用いて打ったり受けたりするなどの攻防を展開すること」、第３学年では、「相手の動きの変化に応じた基本動作から、基本となる技や得意技を用いて、相手の構えを崩し、仕掛けたり応じたりするなどの攻防を展開すること」とされている。

本研究における授業展開は習得→活用→探求から構成し、習得では技の基本的な動きを学ぶ。活用では打つ機会や相手との条件（理合）を中心に学び、技の使い方を練習し、動きの質を高める。ここではペア学習やグループ学習を積極的に取り入れ、練習方法の工夫や個々の課題解決に取り組ませる。そして、その結果から活用で学んだ内容を探求で技の習得状況を確認する。その結果から課題を振り返り、また次の時間の展開で学ぶというスパイラル学習を行う。

本研究において各学年　目標を次の（表１）ように設定した。

表1　各学年の目標

学年	目標	段階	授業段階の目標	身に付けたい力
1	仕掛け技などの基本的な技能を身に付け、相手の動きに応じた基本動作から、基本となる技を用いて、相手との攻防を楽しむ。	習得	基礎を学び基本の動きを身に付けよう。	**剣道の楽しさと基礎基本** ・相手を尊重し、協力して学習に取り組もうとする。 ・伝統的な行動の仕方を守ろうとする。 ・判定試合や試合などで、基本となる技を用いて相手に応じた攻防ができる。
		活用	基本動作を生かし対人的技能を試そう。	
		探究	面を主とした攻防を楽しもう。	
2	相手を尊重し、技の自己課題の解決を図りながら、基本となる技を身に付け、練習や試合での攻防を通して、剣道を楽しむ。	習得	基礎を学び基本の動きを身に付けよう。	**剣道の特性を踏まえた基本の活用** ・相手を尊重し、協力して学習に取り組もうとする。 ・簡単な試合で、有効打突の判定基準を理解している。 ・簡単な試合で、有効打突の判定基準を理解している。
		活用	自分に合った技を見つけよう。	
		探究	身に付けた技で相手との攻防を楽しもう。	

3	相手を尊重し、技の自己課題の解決を図りながら、相手の動きの変化に応じた基本となる技や得意技を身に付け、相手を崩し、仕掛けたり応じたりするなど練習や試合での攻防を通して、剣道を楽しむ。	習得	基礎を学び基本の動きを身に付けよう。	**剣道の特性を踏まえた得意技を生かした攻防** ・伝統的な行動の仕方を大切にしようとする。 ・剣道を継続して楽しむための自己に適した関わり方を見つけている。 ・得意技を見つけ、相手との攻防に生かすことができる。
		活用	自分に合った得意技を習得するための練習を工夫しよう。	
		探究	相手の打突に応じた攻防を楽しもう。	

（２）「安全で緊張感を楽しめる試合」の成立のための単元計画

本研究では、「試合の成立」を可能にするためにの「基本動作」と「基本となる技」の系統性に重点をおいて単元計画を作成した。

「試合の成立」とは、 安全・安心が前提であることと、試合者や審判、見学している者が、有効打突を見極めることができ、攻防をドキドキしながら行ったり、見学したりすることと捉えた。

２　先行研究とのつながり

中学校の武道必修化には多くの課題が提起されている。施設、用具の確保といった物理的な問題から、授業評価、指導方法、さらには諸事情により武道ができない生徒への配慮など、内面的な問題まで様々である。山口県教育庁学校安全・体育課や長野県教育委員会事務局スポーツ課が行った研究では、中学校における単元計画のたて方から、剣道授業の実践まで提起した。しかしいずれの論文も柔道・剣道といった大多数の学校が採用する武道に的を当てたもので、剣道を専門としない教員が分かりやすく教えることができるとは言いにくい。本研究は、剣道専門外の先生でも比較的指導しやすく、すぐにでも取り組むことができるような資料集でありたい。

３　教材の概要

剣道の初心者が剣道を楽しく学び、深めていくためには、「相手の動きに応じた攻防ができるようにする」ことが求められる。自分の体格や体力、適性などに応じ、最も使いやすい技（得意技）を身に付けることができ、相手に有効打突を打ち込めることは、剣道の楽しさや喜びを味わうことに大きく関連してくる。基礎・基本の習得をベースに、学習内容を精選し、習得を活用していく３年間の過程を構築し単元構成を開発する。

（１）単元構造図・単元計画

中学校３年間を見通した対人的技能の系統性と単元構成の工夫技の系統性については、全日本剣道連盟の「剣道指導の手引き」（竹刀操作と体の動きの関係による基本の打突と対人的技能の取扱い）で分析されている。このように剣道では、竹刀操作と体の動き、対人的技能があるので、竹刀操作が複雑で、動きが多様化し、個々の能力や特性も異なるので一概に技の習得に順序性を持たせるのは難しい。

本研究では、学習する技を精選するとともに、各技を学年の目的に応じて配置した。中学１年生の段階では広い範囲で技の形を学び、中学２年生では打つ機会をつくりやすいように仕掛け技と引き技をセットにして学習し、習熟の進んだ中学３年生では、応じ技を中心に学習するよう設定した。

技の種類と理合を系統的に配列することで、それぞれの学年で習得すべき技の種類を網羅しながらも、技を試合で使うための打つ機会や相手の反応を含めた理合の部分も系統的に学ぶことができると

考え図１のような単元構造図と図２のような単元計画を作成した。

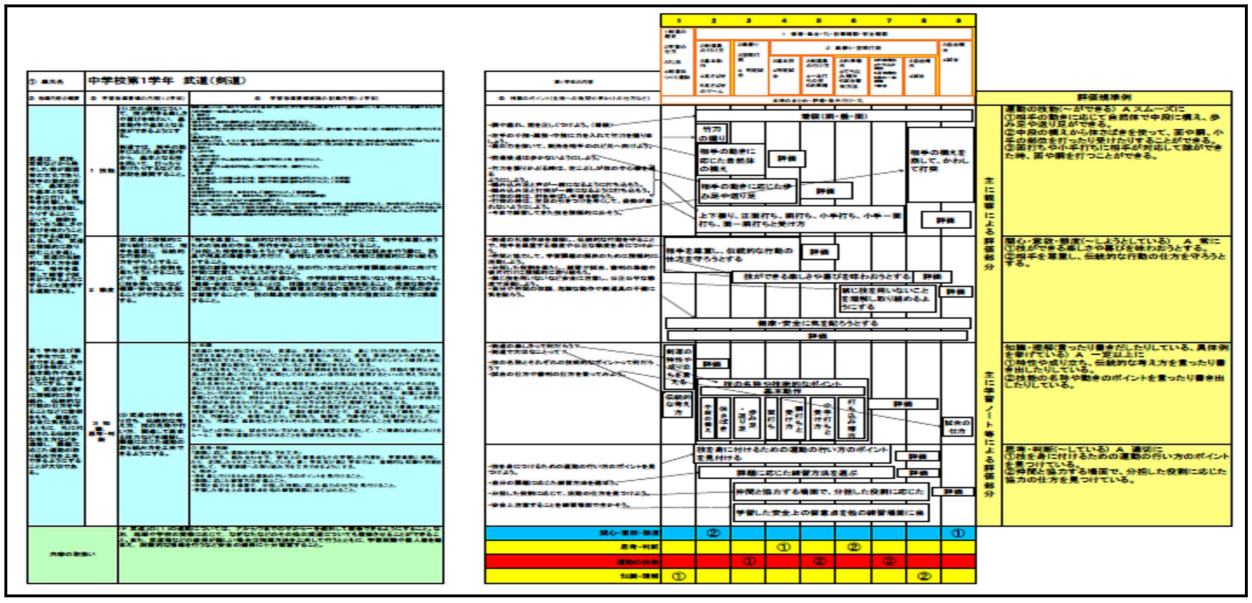
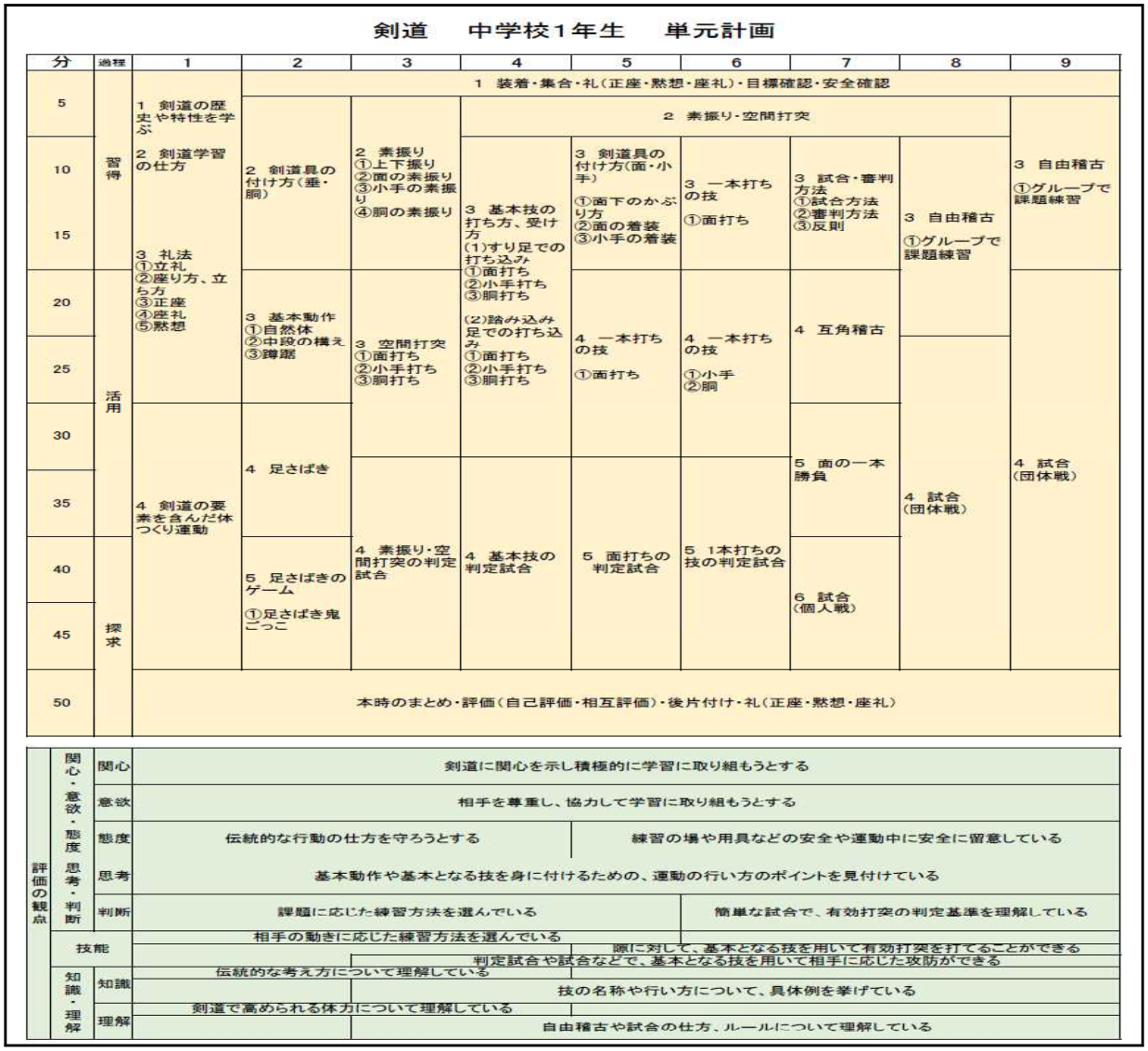


図1　第1学年の単元構造図



剣道　中学校１年生　単元計画

分	過程	1	2	3	4	5	6	7	8	9
5	習得	1 剣道の歴史や特性を学ぶ	1 装着・集合・礼（正座・黙想・座礼）・目標確認・安全確認							
10	習得	2 剣道学習の仕方	2 剣道具の付け方（垂・胴）	2 素振り ①上下振り ②面の素振り ③小手の素振り ④胴の素振り	2 素振り・空間打突 3 基本技の打ち方、受け方 (1)すり足での打ち込み ①面打ち ②小手打ち ③胴打ち (2)踏み込み足での打ち込み ①面打ち ②小手打ち ③胴打ち	3 剣道具の付け方（面・小手） ①面下のかぶり方 ②面の着装 ③小手の着装	3 一本打ちの技 ①面打ち	3 試合・審判方法 ①試合方法 ②審判方法 ③反則	3 自由稽古 ①グループで課題練習	3 自由稽古 ①グループで課題練習
15	習得	3 礼法 ①立礼 ②座り方、立ち方 ③正座 ④座礼 ⑤黙想								
20	活用		3 基本動作 ①自然体 ②中段の構え ③蹲踞	3 空間打突 ①面打ち ②小手打ち ③胴打ち		4 一本打ちの技 ①面打ち	4 一本打ちの技 ①小手 ②胴	4 互角稽古	4 試合（団体戦）	4 試合（団体戦）
25	活用									
30	活用	4 剣道の要素を含んだ体つくり運動	4 足さばき					5 面の一本勝負		
35	活用			4 素振り・空間打突の判定試合	4 基本技の判定試合	5 面打ちの判定試合	5 1本打ちの技の判定試合			
40	探求		5 足さばきのゲーム ①足さばき鬼ごっこ					6 試合（個人戦）		
45	探求									
50	探求	本時のまとめ・評価（自己評価・相互評価）・後片付け・礼（正座・黙想・座礼）								

評価の観点			
関心・意欲・態度	関心	剣道に関心を示し積極的に学習に取り組もうとする	
	意欲	相手を尊重し、協力して学習に取り組もうとする	
	態度	伝統的な行動の仕方を守ろうとする	練習の場や用具などの安全や運動中に安全に留意している
思考・判断	思考	基本動作や基本となる技を身に付けるための、運動の行い方のポイントを見付けている	
	判断	課題に応じた練習方法を選んでいる	簡単な試合で、有効打突の判定基準を理解している
技能		相手の動きに応じた練習方法を選んでいる	
		隙に対して、基本となる技を用いて有効打突を打てることができる	
		判定試合や試合などで、基本となる技を用いて相手に応じた攻防ができる	
知識・理解	知識	伝統的な考え方について理解している	
		技の名称や行い方について、具体例を挙げている	
	理解	剣道で高められる体力について理解している	
		自由稽古や試合の仕方、ルールについて理解している	

図2　第1学年単元計画

（２）１時間ごとの授業展開案

剣道の技は、単に自分が打ちたいから打ち込むというだけではない。刻々と変化する状況の中で、

自らの「気・剣・体」を協応させながら、互いに攻めの機会を探り合い打ち込むことで成立する。このような一本を、剣道の経験のない生徒が授業の中で理解することは大変難しく、もし仮に基本的な打ち方を身に付けても、「技はできるようになったけど、どの機会にどこを打てば良いか分からない」ということになりやすい。

そこで中学校において剣道の技能を試合に生かせるものとして系統的に身に付けさせていくには、相手の変化に対応する動きを中核に据えながら、その練習内容を工夫していく必要があると考える。そこで、剣道の対人的技能を機能的に習得し、緊張感を楽しめる試合をするために、授業展開に位置づけ展開する。（図３）

「単元プログラム」における授業展開は習得→活用→探求から構成し、習得では技の基本的な動きを学ぶ。活用では打つ機会や相手との条件（理合）を中心に学び、技の使い方を練習し、動きの質を高める。ここではペア学習やグループ学習を積極的に取り入れ、練習方法の工夫や個々の課題解決に取り組ませる。そして、その結果から活用で学んだ内容を探求で技の習得状況を確認する。その結果から課題を振り返り、また次の時間の展開で学ぶというスパイラル学習を行う。中学校１年生の授業展開のモデルを示した。（図４）

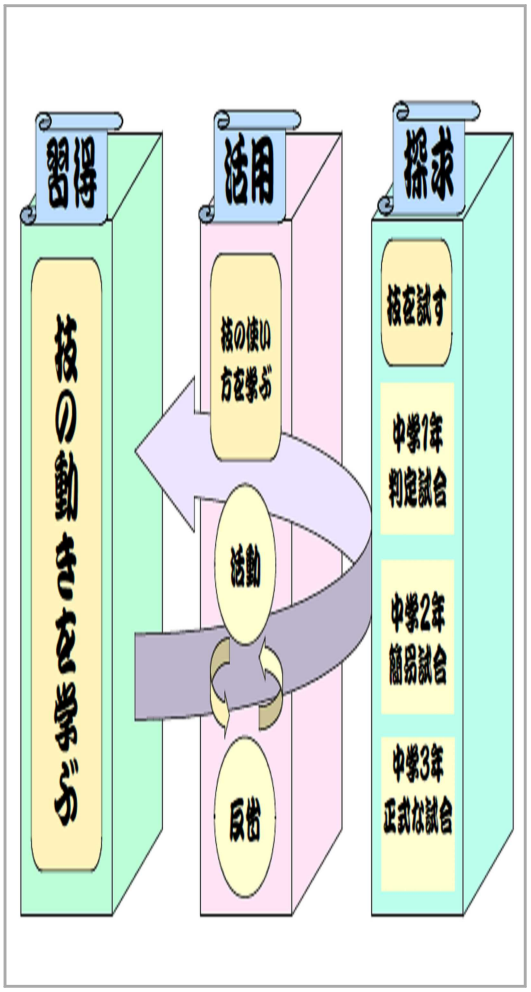


図3　授業構想図

中学1年生　　4／9時間

本時のねらい	基本技の打ち方、竹刀での受け方を理解し、打ち込むことができる。			
過程	時間	学習活動	指導支援の留意点	DVD
習得	5	1　整列、挨拶、課題の確認 基本技を身につけよう		
	5	2　素振り・空間打突	・元気よく発声し、刃筋正しく行わせる。	
習得・活用	20	3　基本技の打ち方・受け方 (1)すり足での打ち込み ①面打ち ②小手打ち ③胴打ち	・受け方の方法を示範し、周囲の安全や竹刀の安全点検に留意させながら行わせる。 ・基本技の受け方 ・打突と発声が一致するようにさせる。(気剣体の一致) ・刃筋正しく打っているか弦の向きに注意させる。 ・胴打ちは直接打突部位を打たせる。	8 基本技
		(2)踏み込み足での打ち込み ①面打ち ②小手打ち	・踏み込み足は無理な踏み込みにならないよう、右足から体を出す動きを身につけさせる。	
探求	15	4　基本技の判定試合	・試合方法、審判の判定基準、宣告・判定方法について説明する。 ・審判は試合者に判定による勝敗の理由を伝える。 ○判定基準①発声　②打突位置　③刃筋　④足さばき ・礼法や所作事も正確に行わせる。	5 判定試合
	5	6　本時のまとめ ①自己評価 ・正座、黙想、座礼	・本時のまとめをする。 ○姿勢や礼法を確認する。 ○道具の片付けを確認する。 ・道場の出るときの礼法を行う。	

図4　　授業展開案（第1学年4/9時）

（３）指導用ＤＶＤの活用

剣道の授業において基本動作や基本となる技などの具体的な技能指導は、剣道を専門でない指導者にとってとても困難なことである。そこで、動画や静止画のICT教材を用意して技能指導の場面や、グループでの学び合いの活動の場面で活用できるようにした。

図5　指導用ＤＶＤ（足さばき）

（４）教具の開発

剣道の授業を経験した生徒で、ここを改善してほしいという意見は、竹刀で打たれて「痛い」と言う回答が最も多い。このことから、相手を痛くさせないために、手加減をして打突する生徒が多くなる。そこで、塩ビパイプと凍結防止用のカバーを使用して作成した竹刀（ITAKU竹刀）を使用して、痛さを緩和することにより、取り組む意欲の向上を図る。

４　研究構想図

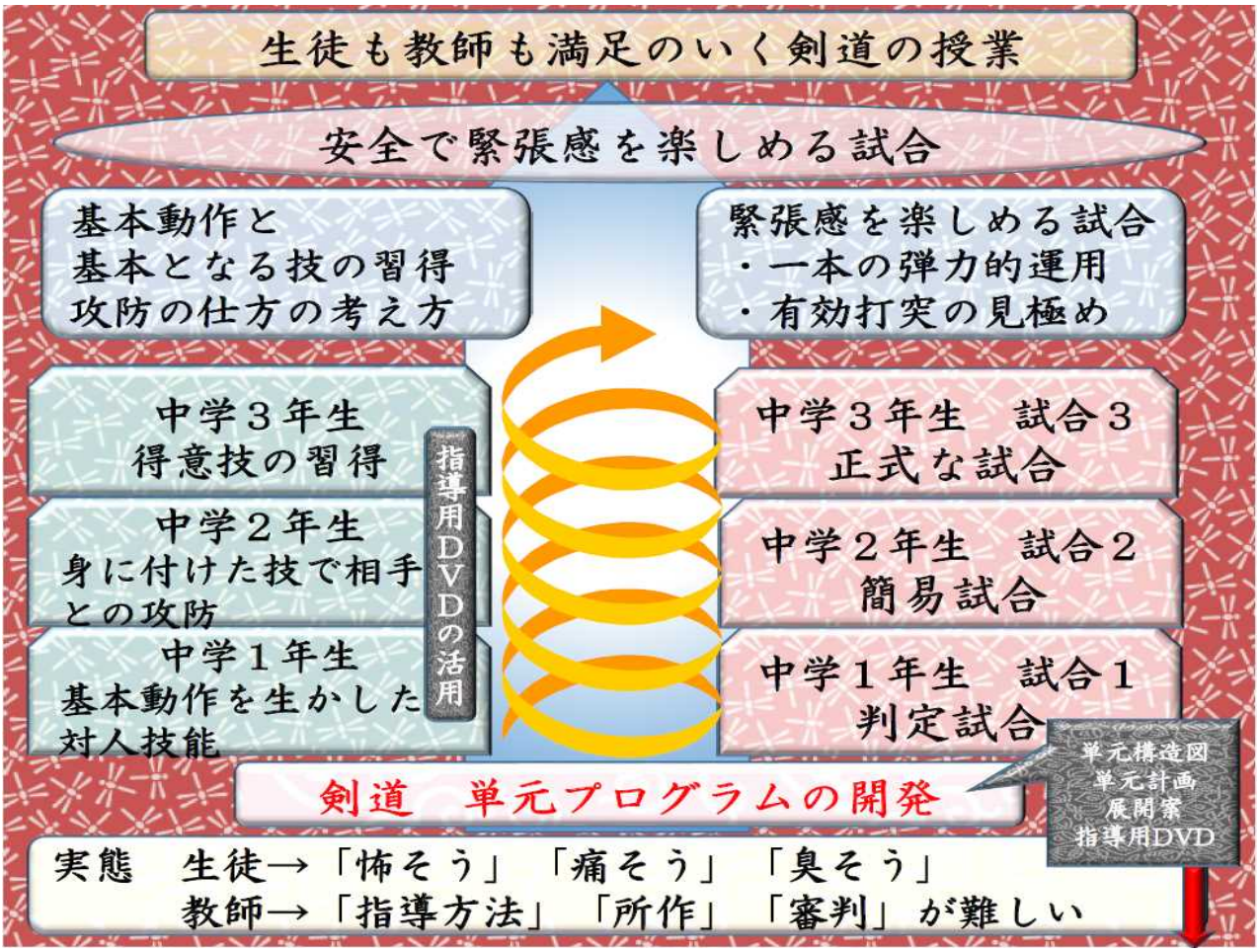


図6　研究構想図

Ⅳ　研究の計画と方法

１　実践の概要

対　　象	研究協力校　第１学年　36名
実 践 期 間	平成26年11月4日～11月21日　9時間
単　元　名	「武道」剣道
単元の目標	仕掛け技などの基本的な技能を身に付け、相手の動きに応じた基本動作から、基本となる技を用いて、相手との攻防を楽しむことができる。（１年）

２　検証計画

検証の観点	検証の方法
教師が「単元プログラム」をもとに授業を行ったことは、「安全で緊張感を楽しめる試合」の成立に有効であったか。	授業中の教師の観察 アンケート結果の分析
生徒に「単元プログラム」やワークシートを活用させながら剣道の授業を行ったことは、「安全で緊張感を楽しめる試合」の成立に有効であ	授業中の生徒の観察 アンケート結果の分析

ったか。	

3　実践

	学習内容	「単元プログラム」の活用場面
第1時	剣道の歴史や特性などを知るとともに、学習の仕方について理解することができる。	【礼法】 日本の伝統的な行動の仕方を指導用のDVDを使い一斉指導をした。 図7　蹲踞の練習風景
第2時	相手の動きに応じた基本動作を理解することができる。	【基本動作・足さばき】 基本動作・足さばきのグループ練習で、指導用DVDを使って課題を考えさせて、グループでの学び合いの活動を行った。 図8　グループでの練習
第3時	素振りや空間打突の方法を知り、刃筋正しく気剣体一致した素振りや空間打突ができるようにする。 図9　指導ＤＶＤの視聴風景	【素振り・空間打突】 素振り・空間打突のやり方を指導用DVDで確認して、自分の課題を見つけて課題解決学習を行った。 自分の姿とDVDの姿の違いを課題として捉えて練習をする。 図11　素振りの風景
第4時	基本技の打ち方、竹刀での受け方を理解し、打ち込むことができる。	【基本技の打ち方】 基本技の打ち方と打たせ方をグループ練習で、指導用DVDを使って課題を考えさせて、グループでの学び合いの活動を行った。 図12　基本技の打たせ方（ＤＶＤ）
第5時	面、小手の装着を理解し、一本打ちの技の打ち方を理解することができる。	【剣道具の付け方】 仲間と協力して、面をつけさせた。面下の兜型は指導用DVDで確認した。 図13　剣道具の付け方

第6時	一本打ちの技を理解し、約束稽古・打ち込み稽古を行い試合での攻防に生かすことができる。 図14　約束稽古のやり方	【約束稽古のやり方】 約束稽古のやり方を指導用DVDにて指導した。 元立ちは掛かり手の打ちに合わせてタイミングよく打つ機会を与えるようにさせる。 図15　約束稽古
第7時	一本打ちの技を習熟するために、打つ機会を大切に約束稽古を行い、互角稽古・試合での攻防に生かすことができる。	【互角稽古のやり方】 互角稽古のやり方をグループ練習で、指導用ＤＶＤを使って課題を考えさせて、グループでの学び合いの活動を行った。 図16　互角稽古のグループ練習
第8・9時	互いに打突し合う中で、有効打突をとるために、基本打突の練度を高め、試合での攻防に生かすことができる。 図17　試合のやり方	【試合】 グループでの自由稽古（課題練習）を行った後に試合を行った。 ・有効打突の条件 ①打突部位に当たっている ②大きな声 ③打突後残心をとっている ・竹刀や防具の安全点検 ・礼法を正しく 図18　試合風景

Ⅴ　研究の結果と考察

1　今回の剣道の授業で学んだものは何か。

「剣道で学んだものは何か」をまとめたものである。（図１９）

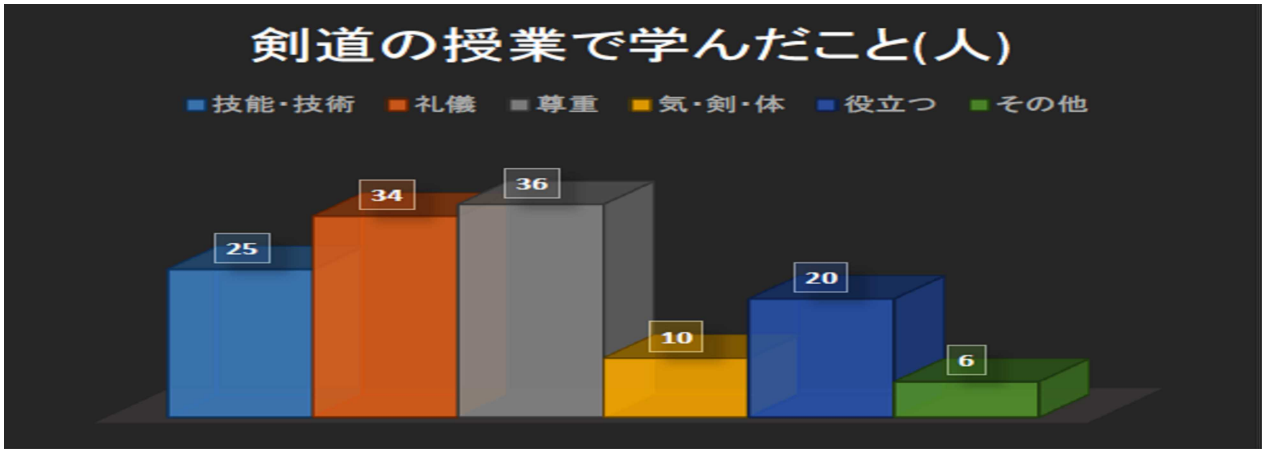


図19　アンケート結果（剣道の授業で学んだこと）

（1）【剣道の技能・技術】【剣道の奥深さ、気・剣 ・体】

「中心を取り攻めると相手が動けなくなる。人間の体の弱点」「守ることも攻撃の一つだ」「剣道独特の足さばき、手と足の供応動作」「竹刀は一本のてこで、右手と左手を支点・力点にして使い分けると上手く操作できる」「剣道の奥深さ、真剣勝負の緊張感を感じた」等剣道の独特の技能・知識等が多く見られた。

（2）【精神的なもの・厳しさ・相手を尊重すること】【社会に出て役立つ】

「一緒に練習した相手に感謝すること」「集中力・自分を冷静に見つめる大切さ」、「剣道は、相手に勝つことでなく、自分に勝つこと」等や「自信を持ってやれば何でもできる」「物事に一生懸命に取り組む大切さ」「人間はねばり強さが大切」、「健康であれば何でもできる」等暑さ厳しい悪条件の元、厳しく相手と対じし攻め合い・守り合いの中から精神的に学ぶことが多かったと思われる。「精神的な鍛錬(中だるみを直すため頑張った)」との回答からも、ややもすると厳しさ・苦しさから逃げ、安易な楽しみに走りやすい最近の中学生が剣道の授業で厳しさ・苦しさの中やそれを通した後に楽しみや喜びがあることを発見し、それが新鮮なものに写ったのだと推測される。

（3）【その他】

「自分が臆病であること」「人間が臆病だということ」というように相手との攻防の中で心の内面で自分と対峙した記述もある。「平常心」と答えた者もいるが剣道で言われる四戒「驚懼疑惑」の戒めを感じたのであろう。また「日本のスポーツの面白さ」、「礼儀を重んずる日本文化」等が見られ、単に技術だけでなく学ぶところが多く、剣道の教材としての奥深さが感じられる。

2　剣道で礼を重んずることについて

『剣道は礼に始まり、礼に終わる』という言葉があるように剣道では礼儀を重んずる。この礼儀について「剣道では、礼を重んじるがそれついてどう思うか」について生徒たちの回答の代表的なものをに列挙する。（表１）格闘技としての剣道での礼の必要性や剣道で身に付けた礼儀作法が社会に出ても役立つなど、表現は違えいろんな角度から礼儀の重要性を回答している。しかし、礼儀はどんなスポーツでも大切で剣道が特別ではないという回答もあった。いずれにしても本研究でも、相手をお互いに認め・尊重することを礼で表すことを重点の一つとして授業を展開したが、生徒はお互いに認め合い、尊重する礼儀の重要性を考え、授業だけでなく、社会に出ても必要で大切なことだと感じたことは予想以上であった。

表1　礼を重んずることについて

礼儀を大切にする剣道は、相手との競い合い、勝ち負けの世界でないことがよくわかった。
相手には最大限の敬意を払うことが戦いにおける礼儀だと思う。
剣道だけでなく、生活の場面でも礼儀正しくしようと思う。
他のスポーツでは体験できないものだった。
剣道のように礼儀を大切にするものが少ないので良い。
自分を冷静に見つめなおすことが出来る点でも良かった。
社会に出てからも礼儀は大切だと思うので今回の剣道はとてもためになった。
本気で打ち込んでいくためには、相手への思いやりと相手を尊重する気持ちが伴わなければならないので、剣道で礼儀を重んじるのは当然だ。
礼儀を重んじることによって気持ちよく始められ、負けても勝っても気持ちがすっきりする。
礼儀を身に付けるいい機会だった。相手を尊重するとかそういう面で勉強になった。
礼儀を重んずることは、相手に気遣い、自分を気遣うことにもつながる。
武道以外ではなかなか勉強できないので大切である。
昔はあんな礼儀が普通だったのだろう。今の人が礼儀を知らないだけか?
どこの国でも同じだが、特に日本では礼を重んじていてそれは良いところだ。
剣道だけでなく、生活の一場面でも礼儀正しくしようと思う。
他のスポーツにおいても大事、ただ表現の仕方が違うだけ。
相手を尊重する礼儀がなければ、ただの喧嘩と同じになる。

３　授業の振り返り

今回の授業を生徒たちは、どのような捉えているか、振り返りをした。（図２１）この図は、８項目を肯定的な「はい」から否定的な「いいえ」までを５から１の５段階に数値化し、それぞれの段階の人数とその数値の積の総和を総人員で割り平均値をグラフ化したものである。

これを全体的に見ると①～⑧まで全ての項目で今回の授業を好印象で捉えてことが分かる。特に「⑤真剣な気持ちで積極的に参加したか。」「⑥相手を尊重して礼儀正しく練習したか。」は高率を示している。

今回の学習計画に基づく授業で生徒たちは、授業のねらいを理解し、課題を持ち、考え、工夫をし、真剣な気持ちで楽しく取り組んだと総括できる。

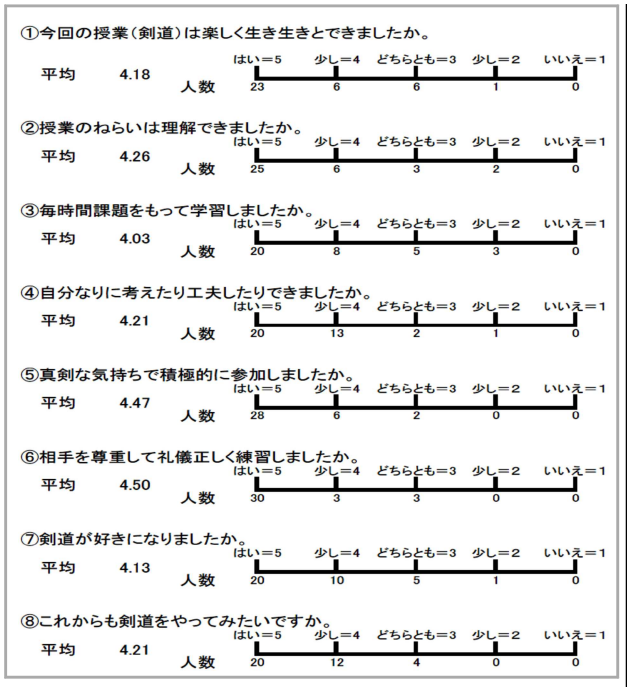


図21　アンケート結果（授業のイメージ）

４　教師から見た単元プログラム

本単元プログラムを、協力校の体育教諭（本校１年目・初任者）に実践をしてもらった。この教諭へのアンケートから、単元全体の見通しができ、展開案があることで１時間１時間が迷わずに授業ができたと好回答を得た。また、指導用の DVDがあることで、剣道の経験のない教師でも、自信を持って授業することができ、生徒のも真剣に取り組んでいた。

また、この『単元プログラム』があることにより、教材研究の時間が大幅に短縮することができ、部活動やその他の学校の業務に時間を割くことができた。このような結果が得られたことから、本研究は、剣道専門外の教員、教師としての経験の少ない教員にも有効に活用できるものと考える。

Ⅵ　研究のまとめ

１　成果

「判定試合」と「簡易試合」の二つの内容の試合を設け、発展的につなげたことは、攻撃の様相を「打突部位の選択」→「打突部位と技の選択」へと発展的させることになり、生徒の意欲や技能を系統的に高める上で有効であったと考える。

「試合」→「自由稽古」→（自分の課題を解決するための練習）という授業展開を仕組んだことは、漠然と試合に臨むのではなく、具体的な目的を持って試合に取り組ませることにつながり、より「緊張感を楽しめる試合」の成立に有効であったと考える。

一本（判定）の基準を弾力化し生徒に分かりやすく示したことは、目標設定や相互評価が容易になったり、審判しやすくなったりすることで、活動意欲を高め、練習や試合を活性化させる上で有効であった。

２　課題

今回は、時間的制約があったため単元プログラムの一部しか実施することができなかった。したがって、中学２年生と３年生の未実施の部分の実践について検証を行う必要がある。

研究の内容が中学１年から３年へと長期に及ぶため、単元プログラムのさらなる充実のためには、今後継続的に研究に取り組む必要がある。

Ⅶ　今後の研究に向けて

１　『独特な動きのつまずき』への指導・支援の工夫

部活動では反復練習をする時間が設定できるが、教科体育の授業では、限られた時間での指導展開が求められる。独特な体の動かし方（踏み込み動作とその一体化等）に戸惑う生徒も多く、運動量の確保を視野に入れた楽しい反復練習の方法や展開を更に工夫していきたい。

２　日本の伝統文化を学ぶ授業開発

防具のない学校でも、剣道の授業は可能であり楽しく「日本の伝統文化」のよさや特質を学べるよう工夫した単元構成を更に考えたい。また、防具を着けて互いに打ち合う実践形式だけでなく、「日本剣道型」や「木刀による剣道基本稽古法」を用いた授業展開や教材開発の可能性も今後の課題の一つである。

３　剣道の授業における教育効果（人間形成）

剣道の授業は精神や心・態度面でも高い教材性がある。指導過程のさらなる工夫、生徒の意欲を高めながら、健康や生涯スポーツ、人間形成に寄与できればと考える。

４　提言

日本の伝統文化の一つである剣道を学ぶことは、運動の楽しさやだいごみ、技術の習得・活用にはとどまらない。授業の過程を通して、剣道特有の人としての礼儀・他者を尊重し向き合う態度・的確な判断力と対応（表現力）・困難に負けない気力と克己心や忍耐力などを養うことができる。こうしたことは中学生にとって、実社会で強く生きるための自己の確立を図るステップともなり、剣道の授業を通して生涯にわたって自らを鍛え向上させることや健康な体・豊かなスポーツライフへとつながっていくはずである。

＜参考文献＞

・全日本剣道連盟　　『剣道授業の展開』　全日本剣道連盟(2009)
・全日本剣道連盟　　『剣道授業の展開　ダイジェスト版』　全日本剣道連盟（2013）
・長野県教育委員会事務局スポーツ課　『剣道指導の手引き』　長野県教育委員会（2012）
・山口県教育庁学校安全・体育課　　『武道指導の手引』　山口県教育庁（2011）

＜担当指導主事＞

鶴見　純也　　長沼　祐子